

国分寺1976

(1)『国分寺1976』をめぐって」

「国分寺レイディオ」は、国分寺のまち、ひと、自然、歴史などを掘り下げて紹介するポッドキャスト番組です。東京経済大学地域連携センターが制作、運営しています。

こんにちは。ライターの前松佐左衛門です。

国分寺を中心に中央線サブカルチャー、カウンターカルチャーについて調べています。

このたび、東京経済大学 地域連携センターさんからご依頼があり、

「国分寺レイディオ」の中で「国分寺1976」というシリーズを始めることになりました。

よろしくお願いいたします。

第1回目の今回は、『国分寺1976』をめぐって」というテーマでお話しします。

それでは最後までお付き合いください。

『国分寺1976』をめぐって

改めましてライターの前松佐左衛門です。

今回のテーマは『国分寺1976』をめぐって」ですが、今聴いていただいている方々のなかで『国分寺1976』という曲をご存じの方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。

残念ながら、おそらくほとんどおられないのではないかと思います。

と言いますのは、今回、この番組を制作するにあたって、国分寺市役所や東京経済大学の方々、合計10名ほどの方々にうかがってみたところ、予想どおりだったのですが、ご存じの方は一人もおられませんでした。

しかし、実際に聴いていただくと「いい曲ですね」という感想を大半の方からいただいています。

ほとんど知られていない、『国分寺1976』という曲は、まさしく隠れた名曲なのだということから今回は話してゆきたいと思います。

『国分寺1976』は、俳優、映画監督、歌手として知られる竹中直人さんが、1996年に、アルバム『レーザー・ヘッド』の中の1曲として発表した曲です。

作詞・作曲はザ・ブームの宮沢和史さんです。シングル曲としては発売されていません。

本当ならば、ここでこの曲を聴いていただきたいのですが、残念ながらお聴きいただくことができません。

努力はしたのですが許諾の問題のためにこの番組でかけることはかないませんでした。
YouTube で検索しても、Spotify などの定額音楽配信で検索しても、この曲の音源は出てきません。

この曲を聴くためには、竹中さんの『イレーザ・ヘッド』という CD を購入する以外の手段がないのです。

しかし、歌詞は検索できるので、可能な方はネットで検索して歌詞を見ていただければと思います。

<https://petitlyrics.com/lyrics/2696291>

<https://www.youtube.com/watch?v=F-Mn43YJI0o>

この曲で描かれているのは、国分寺で暮らしていた 1976 年頃の少し苦い追憶です。

曲の主人公は彼女と二人で国分寺のアパートに暮らしながら自分の夢を追いかけていました。おそらく、それは俳優になるという夢だと思われます。

中央線に乗ろうとしても乗り遅れてしまうなど彼は何をやってもうまくゆきません。

曲の中では「走り去った電車はいつも 届かぬ夢を乗せて行く」と歌われています。

そんな自分を支えてくれている彼女の本当の気持ちや考えを理解していなかった主人公は、おそらく些細なすれ違いから別れることになったのでしょう。

もう少し彼女への配慮があればすれ違うことなく今も一緒に暮らしていたかもしれない。

けれども、時は流れ、痛みや苦さはいつの間にか思い出となり、改札口で手をふる彼女の面影も記憶から消えかけようとしています。

「君のなごりが風に舞う」「面影だけが風に舞う」と歌われているように、1976年から1996年までの20年という時間は、やさしく、同時に、残酷だと思います。

1976年の国分寺の若者たちの姿を描く中に、70年代的な考え方や時代そのものへの追憶がそこにあるような気がしてなりません。

この曲のプロデューサーは、YMOのメンバーだった高橋幸宏さんです。サウンドも素晴らしく、間奏部分の高橋さんのドラムスや駒沢裕城さんのペダルスティールギターの演奏などは、聴いていて本当に心に沁みるものがあります。

●『国分寺1976』という曲のルーツ①

『国分寺1976』という曲には2つのルーツがあるように思えます。

一つ目は、作詞・作曲の宮沢和史さんのバンド「ザ・ブーム」が、1990年に発表した『中央線』という曲です。

『中央線』は、TVコマーシャルで使われ、矢野頤子さんなどにカバーされていますのでご存じの方が多いと思います。

ちなみに、矢野頤子さんのピアノ弾き語りのカバーは本当に素晴らしいです。

「逃げ出した猫を 探しに出たまま もう二度と君は 帰ってこなかった」

「今頃君は どこか居心地のいい町を見つけて 猫と暮らしてるんだね」

と歌われる、穏やかな喪失感を抱えた主人公の青年は、『国分寺1976』と同一人物のようにも思えます。

サビの部分では

「走り出せ 中央線 夜を越え 僕を乗せて」

と力強く歌われています。これは中央線の車両と自己が一体化して夜の中を突き進んでゆくイメージです。

この頃の中央線の車両は、赤みが勝ったオレンジ色で全面を塗られていましたから、夜の闇の中を貫く一筋の炎のような絵が浮かび上がります。

『国分寺1976』では、中央線が自分を乗せないで走って行ってしまうので、自己を投影するものと一体化しないこと、つまり、自分の夢がかなわないことを象徴しています。

宮沢和史さんの『中央線』には、おそらく非常に大きな影響を与えたと思われる曲がありません。

それは、友部正人さんが1972年に発表した『一本道』という曲です。

この曲は、YouTubeなどで検索して聴くことができますので、可能な方は、ここで一旦この番組を止めて視聴していただければと思います。

[友部正人 一本道 EP盤 1972年 - Bing video](#)

いかがでしたでしょうか？

すごい曲ですね。

1972年に高校生だった長渕剛さんも、すでにスターとなっていた吉田拓郎さんもこの曲を聴いてショックを受けたようです。

この曲の歌詞で一番強烈なのは、

「あゝ中央線よ空を飛んで あの娘の胸に突き刺され」

と歌われる部分です。

中央線の車両と自己が一体化する強烈な詩的イメージにノックアウトされます。

ここで友部正人さんとフォークソングという音楽ついて少し説明したいと思います。

1950年代後半からのアメリカのフォークソングの流行は、60年代初めにボブ・ディランという圧倒的な表現者が出現したことでアメリカ以外の国でも盛り上がりを見せます。

日本ではやや遅れて60年代半ばごろからフォークソングのブームが始まっています。時事的なトピカル・ソングや、社会に対しての異議申し立てであるプロテスト・ソングとしての日本のフォークソングは60年代後半の関西から始まりました。

日本で最初のインディーズ・レコード会社である URC レコード所属の、高石友也、岡林信康、五つの赤い風船、中川五郎、高田渡、友部正人といった自作自演のフォークシンガーたちが作りうたう歌は、60年代後半の理想主義的な時代背景の中で、当時の若者たちの心を深くとらえることとなります。

この頃のフォークソングはカウンターカルチャーでした。

岡林信康『友よ』、五つの赤い風船『血まみれの鳩』、高田渡『自衛隊に入ろう』といった曲を聴いていただくとそのことがよくわかると思います。

60年代までは、流行歌をつくるのはプロフェッショナルな作詞家や作曲家であり、歌うのもプロフェッショナルな歌手だったのに、これ以降は、素人が自分で作った歌を自分でアコースティック・ギターを弾きながら歌いプロになることが当たり前になってゆくのですね。

70年代に入ると、理想主義的な時代背景が遠のいてゆき、内省的な時代の中でラブソングを中心に歌うフォークシンガーが出てきたことで大衆化が進み、歌謡曲との差が無くなってゆきます。

その中でもとりわけ大きな支持を受けたのが、吉田拓郎や井上陽水といった半世紀後の現在でもスターであり続けるフォークシンガーたちです。

ボブ・ディランの歌詞に深く影響を受けた友部正人さんは、70年代以降も文学的な強い言葉のイメージを持つ素晴らしい歌をつくり続けていますが、1972年の『中央線』という曲とこの曲が収められている1973年のアルバム『にんじん』は友部さんの代表作となっています。

話が少しそれましたので戻しますと、『国分寺1976』のルーツには宮沢和史さんの『中央線』があり、さらに『中央線』のルーツは友部正人さんの『一本道』があるのです。

●『国分寺1976』という曲のルーツ② 「三寺」の流れ

『国分寺1976』にはもう一つのルーツがあります。

それは「三寺」の流れです。

「三寺」という聞きなれない言葉が出ましたので少し説明したいと思います。

中央線沿線が70年代にサブカルチャーのまちになっていったときに、中心となったのは、高円寺、吉祥寺、国分寺の三つのまちでした。

三つとも名前に「寺」の字が入るまちなので「三寺」と呼ばれていたと言われています。

実際には、自然に呼ばれるようになり広まっていったわけではなく、メディアが名付けた呼び名なのでそれほど普及はしなかったようです。

しかし、この三つのまちが中央線サブカルチャーの中心だったことは間違いありません。

●高円寺

まず、高円寺ですが、70年代前半はフォークソングのまちでした。

70年代初めに、すでにフォークシンガーとしてスターになっていた吉田拓郎さんが住んでいたことの影響が大きかったようです。

特に、1972年のアルバム『元気です。』のB面1曲目（8曲目）の『高円寺』という1分27秒ほどのブルース調の短い曲が、高円寺にフォークシンガー希望の若者たちを集めるきっかけになったことは間違いのないようです。

このアルバムは発売1か月ほどで40万枚の売り上げという、当時としては考えられないほどの大ヒットをしています。代表曲となる、『夏休み』、『たどり着いたらいつも雨降り』、『旅の宿』が収録されています。

吉田拓郎さんにあこがれて武蔵野美術大学入学のために京都から上京したみうらじゅんさんが、70年代後半、最初に住んだまちが高円寺だったことは高円寺フォーク伝説のひとつでしょう。みうらさんは「日本のインド、高円寺」という名言も残しています。

●吉祥寺

吉田拓郎さんは、1971年にフォークシンガーの斉藤哲夫さんの『されど私の人生』という曲をライブアルバムの中でカバーしていました。

斉藤哲夫さんは、1970年、まだ明治学院大学の学生だったとき、シングル『悩み多き者よ』でメジャー・デビューしています。

ボブ・ディランに強く影響を受けた思索的な歌詞は、年齢からは信じられないほど深いものがあることから「歌う哲学者」などと呼ばれて人気がありました。

吉田拓郎さんが『高円寺』という曲を発表した1972年の翌年、1973年に、斉藤哲夫さんは『吉祥寺』という曲を発表します。

『バイバイグッドバイサラバイ』というアルバムの最終曲です。

斎藤さんが『高円寺』という曲を多少は意識していたことは間違いのないでしょうが、この頃のフォークシンガーは自分の身の回りのことを描くことが多かったので、友人が住んでいた好きなまちを素朴に取り上げただけではないかと思えます。

吉祥寺は伝説だらけのまちです。

60年代にはジャズのまちだった吉祥寺は、70年代以降、置き換わるのでなく、追加するような感じで新たな音楽が加わってゆきます。

1970年にできた「ぐうわらん堂」という店は、フォークやブルースの歌手たちの発表の場となり、そこではまだデビューしたての若者だった、高田渡、シバ(三橋乙耶)、友部正人、なぎら健吉といった人たちが、自分の出番のない日にも来て交流する場となってゆきます。なかでも、高田渡という人と吉祥寺のまちは、これ以降、まるでイコールのように結びついている伝説そのものだと思います。

余計な話ですが、生前の高田渡さんは自宅から自転車でほぼ毎日焼き鳥いせやに行き飲んでいたもので、近くに住んでいた私も、しょっちゅう渡さんの姿を見ていました。

ちなみに、吉祥寺というまちが日本全国に知られるようになったのは、1975年から1976年にかけてテレビ放送された『俺たちの旅』という、大ヒットした青春ドラマの舞台となったからです。主演の中村雅俊さんの歌う同名の主題歌も大ヒットします。大学卒業間近に生き方について悩む若者たちが井の頭池に飛び込んだりするこのドラマは、小学生だった私にも青春=吉祥寺という刷り込みを与えることになりました。

話がそれましたので戻しますと、これで「三寺」のうち2つが揃いました。

1972年の『高円寺』、1973年の『吉祥寺』と続いたら、次は1974年には『国分寺』がやってくるような気がします。

しかし、実際には1974年には『国分寺』という曲は発表されませんでした。

国分寺にはミュージシャンがあまり住んでいなかったからなのかもしれません。

竹中直人さんは、「三寺」の流れから考え曲のタイトルを『国分寺』とすることも考えたのではないかと思います。

しかし、ベタに『国分寺』とするよりも、自身が国分寺に住み始めた1976年と組み合わせ、70年代への追憶の歌のタイトルを『国分寺1976』とする判断をしたのではないのでしょうか。

●1976年頃の国分寺

竹中直人さんにとって国分寺というまちは特別なまちです。

1993年に発表した最初のエッセイ集『少々おむづかりのご様子』の中で、多摩美術大学入学時の1976年から80年代初めまでの数年間を過ごしたこのまちで出会った人々やまちの魅力について、自身の青春時代を懐かしみながら、何度もおもしろおかしく描き出しています。

その部分を少し読み上げてみましょう。

「国分寺というまちはとても好きなまちだった。国分寺駅南口を降りて左に折れると、いつも後払いで読みたい本をもっていける『民生書房』。その坂をずっと下りていくと、ツケで何杯もコーヒーを飲ませてくれる、美大生のたまり場『寺珈屋』。金がないときは200円カレーでも300円カレーでも作ってくれる『カレーと民芸の店グルマン』。劇団の研究生の頃、テレビ局に売り込み活動をしていた私に、「出世払いだ」といって衣装を貸してくれた『古着屋』、そして『ピンクフラミンゴ』。店の前を肩を落として歩いていると、「メシ食べてないんじゃないの?」と言って、料理を作ってくれる定食屋の『スズカ』。そんな店がいっぱいあった」（「国分寺ダンスホールへようこそ」）

竹中さんのキャラクターゆえに得をしている部分を差し引いたとしても、人と人が出会い交流してゆく場所としての魅力を持つ店やまちがこの頃の国分寺には確かにあったのですね。

それは、この頃に国分寺で過ごした当時の若者たちが共通して語り文字に記していることからわかります。

1976年ごろの国分寺には、他にも、椎名誠さんの『さらば国分寺書店のオババ』のモデルとなった「国分寺書店」、村上春樹さんがパートナーの陽子さんと1974年に始めたジャズ喫茶「ピーターキャット」（村上さんもエッセイで国分寺時代のことを「楽しい店がいっぱいあった」と書いています）、1975に京都の伝説の喫茶店の2号店としてつくられた「ほんやら洞」（中山ラビさんが店主となったのは1977年です）、1968年に「部族」と自称していたヒッピーたちが自分たちの手で作ったロック喫茶「ほら貝」などの店がありました。

これらの店の中から代表として、村上春樹さんの「ピーターキャット」を紹介します。

村上さんは、ジャズ喫茶を始めた理由について、1984年に発表した最初のエッセイ集『村上朝日堂』のなかでこんなふうに書いています。

「はじめは就職してもいいな、という感じでコネのあるテレビ局なんかを幾つかまわったのだけれど、仕事の内容があまりにも馬鹿馬鹿しいのでやめた。そんなことをやるくらいなら小さな店でもいいから自分一人できちんとした仕事をしたかった。自分の手で材料を選んで、自分の手でものを作って、自分の手でそれを客に提供できる仕事のことだ。でも結局僕にできることといえばジャズ喫茶くらいのものであった」（『村上朝日堂』「国分寺の巻（1）」）

二人でアルバイトをして250万円を貯め、あとの250万円は両方の親などから借りた

500万円を資金として始めたそうです。

この頃の国分寺についても村上さんは書いています。

「その当時の国分寺では500万円あればわりに良い場所で20坪くらいの広さの、結構感じの良い店を作ることができた。500万というのは殆ど資本のない人間でも無理をすれば集められない額の金ではなかった。つまり金はないけれど就職もしたくないなという人間にも、アイデア次第でなんとか自分で商売を始めることができる時代だったのだ。国分寺の僕の店のまわりにもそういった人たちのやっている楽しい店がいっぱいあった」（『村上朝日堂』「国分寺の巻（1）」）

村上さんはジャズ喫茶と書いていますが、「ピーターキャット」は、現在ならばジャズ・カフェという形態のお店だったようです。

1950年代の終わり頃から日本中に広まっていったジャズ喫茶は、60年代の終わりごろが最盛期で、70年代になると都内では閉店する店も出てきます。

ジャズ喫茶に行かなくても自宅のオーディオでレコードを聴くことができる人が増えたことや、ポピュラー音楽の中心がロックに代わっていったことなどが理由としてあると思います。

さらに付け加えるならば、ジャズ喫茶は、真剣にジャズという抽象性の高い音楽と向き合っ
て聴くことが暗黙の了解としてあったために、おしゃべりをしているお客さんにはおしゃべりを止めるか店を出ていくことを促す店が多かったことも挙げられるのではないかと思います。

このため、70年代になると新宿や吉祥寺には、おしゃべりをしながら音楽を楽しめるジャズ・カフェの形態の店が少しずつ出始めたのです。

ピーターキャットは、おしゃべりをしていてもよい、食べ物や飲み物の魅力がある、1950年代を中心とした、ちょっと古い、けれども、心に沁みるジャズを流す居心地の良い店だったようです。

例えば食べ物では、タラコの缶詰であるコッドローとキュウリのサンドイッチなど、おしゃべりで珍しい食材を使った軽食などを出していました。

また、ピーターキャットの紙マッチに、JAZZ'50とあるように、当時の流行だったフュージョンやフリー・ジャズなどのレコードは置いていませんでした。

モダン・ジャズが音楽表現としての深さを獲得してゆくのは1950年代で、マイルス・デイビス、ジョン・コルトレーン、ビル・エバンスといったジャズの巨人たちは、特に50年代から60年代の初めまでに歴史に残る大きな仕事をしています。

60年代半ば以降、ジャズからロックにポピュラー音楽が変わってゆく中で、マイルスはロ

ックやファンクなどを取り入れながら新しい音楽をつくりあげようと試み、コルトレーン
はモダン・ジャズの持つ形式そのものから逃れようとフリー・ジャズに向かってゆくのです。

しかし、村上さんが店で流すことを選んだのはモダン・ジャズがモダン・ジャズとして最も
輝いていた60年代初めぐらいまでのジャズでした。

若い村上さんの、優れたものは流行に関係なく存在するという、頑固さと確かな目利きがそ
こにはあるように思えます。

ちなみに、ピーターキャットの営業終了5分前にはいつも、スタンリー・タレンティン with ス
リー・サウンズの「シンス・アイ・フェル・フォー・ユー」という曲が流されていたそうですが、この
曲を聴いていただくと店の雰囲気を少しだけ感じ取ることができるのではないかと思います。

また、隔週の日曜夜には若手のジャズ・ミュージシャンを中心としたライブも行っていました。

開店当初はお客さんが入らず苦労したようですが、すぐに武蔵美、東経大、津田塾など近隣
の大学生やタツノコプロなど近隣の会社の若い社員たちの居場所となりました。

細い階段を地下に降りて行かなければならない、右手にマスターがいるカウンター、左手に
はテーブル5席ほどの小さな店は、孤独を音楽で慰め、仲間と出会い、新しい何かを知る場
所として重要だったのです。

村上さんはどちらかというと寡黙な人だったようですが、店に流れるジャズや食べ物など
から影響を受けた若者たちは多かったのです。

例えば、東経大スウィングジャズ研究会にいた吉田さんは、学生時代は客として店に通い、
卒業後は千駄ヶ谷に移った「ピーターキャット」で修業し、国立に「キャンディポット」という「ピ
ーターキャット」の雰囲気を強く感じさせる感じの良いジャズ・カフェを1982年に出して
います。「キャンディポット」は惜しまれて2015年に閉店しましたが、コッドローとキュ
ウリのサンドイッチなどのメニューを懐かしむ人はかなりいます。

村上さんは、1977年に千駄ヶ谷に店を移し、仕事を終えたあとに毎日少しずつ書いてい
た最初の小説『風の歌を聴け』で認められ1979年に兼業作家となります。

1982年に3作目となる『羊をめぐる冒険』を発表したころに、店の権利を譲り専業作家と
なり現在にいたります。

なんとなく居心地がよい住みやすいまちなものだけれども高円寺や吉祥寺といったようなメ
ディアでよく取り上げられるまちにくらべてしまうとキャラクターが弱い。

けれども他のまちにはない何かがある。それはなぜなのかわからない。だからうまく伝えることができない。

その中心にあるのは国分寺のまちの深いところを、少なくとも半世紀以上前から流れ続けている、「自由を求め組織を求めない人たちが持っている精神」ではないかと思います。

ほんやら洞店主だった中山ラビさんは、それを「国分寺の人々は一人ひとりで、見事に自由だ」と少しの揶揄を含んでおっしゃっていました。

60年代末頃から国分寺のまちで組織に頼らず「自由」を求めて自分たちのささやかな場所を作り上げようとしてきた人たちの影響は今も残っています。

その源流の一つは、日本で最初のヒッピーたちが60年代後半に国分寺で試みたことであり、その精神が形を変えて現在も様々な人や店などに流れているからなのではないのでしょうか。

それは現在の国分寺に暮らし仕事を営む人々の言葉の中にもあります。

「国分寺は、消費する街ではなく、丁寧に暮らす街です」（「ラジオキッチン」店主・堀田清美さん。「東京生活 2008年」）

「ひたすらお店をつくり、消費者を増やすまちづくりが主流の世の中で、国分寺は消費する人より『つくる人』が多いまちになっていったらいいなと思います。お店を始めるとか大きなことでなくても、ちょっとしたことを自分主導でやれるまち。これまでもそうであったし、これからもそうあってほしい」（「クルミドコーヒー」店主・影山知明さん。「たまら・び」2014年）

これで「国分寺1976」第1回『「国分寺1976」をめぐる』を終了します。

ご意見や感想などありましたら東京経済大学 地域連携センターまでメールでお願いします。

次回、第2回は、「国分寺のヒッピーたち」というテーマでお話します。

お相手は、ライターの近松佐左衛門でした。

最後までお聴きくださりありがとうございました。

次回もお楽しみに。

第1回終了

出演：近松佐左衛門

録音:株式会社モジュール
編集:GO ARAI
ジングル作成・BGM 作曲・演奏:GO ARAI

【参考資料】

CD(LP)

「散歩の達人 Presents 中央線ソングス」(2005年 ビクターエンターテインメント)
「イレーザー・ヘッド」(竹中直人 1996年 アгент・コンシピオ)
「JAPANESKA」(The Boom 1990年 ソニー・ミュージックレコーズ)
「にんじん」(友部正人 1972年 URCレコード)
「元気です。」(よしだたくろう 1972年 CBSソニー・レコード)
「バイバイグッドバイサラバイ」(斉藤哲夫 1973年 CBSソニー・レコード)
「BLUE HOUR」(STANLEY TURRENTINE WITH THE 3 SOUNDS 1960年 ブルー・ノート・レコード)

書籍

「少々おむづかりのご様子」(竹中直人 1993年 角川書店)
「村上朝日堂」(村上春樹 1984年 若林出版企画)
「ジャズ喫茶論 戦後の日本文化を歩く」(マイク・モラスキー 筑摩書房 2010年)

雑誌・ムック他

「東京生活 国立・国分寺をゆっくり散策」(2008年 榎出版社)
「たまたら・び まちの特集 国分寺市」(2014年 けやき出版)

ウェブサイト

<https://moriq84.hatenablog.com/>

<https://wani1974.exblog.jp/i2/>

<http://www.tokyo-kurenaidan.com/haruki-kokubunji2.htm>

以上